

漁師の救済

大正大学教授 玉山成元

元禄二年（一六八九）八月、安房（千葉県）の漁夫ら十三人は、魚を船に積み込んで江戸（東京）に向った。ところが突風におそわれて荒海に流され、方向を見失って数日過ごすことになった。近海漁の小さな船であり、すぐに食糧や水がなくなってしまう。どうしてよいのやらわからず、あせればあせるほど体力は衰え、今は死をまつばかりになった。

漁夫の中に忠兵衛という人がいた。彼は早くから裕天上人に帰依をした念仏者であり、上人の教えを聞き、いただいた名号を大事に襟にかけていた。もうこれまでと思った忠兵衛は、その襟かけ名号を取り出して櫓の端にかけて本尊とし、高い声で念仏を称え一心に後世を祈った。他の十二人も、忠兵衛といっしょに念仏を称えた。その夜もだんだんふけてゆき、真夜中になったときに、空中に声があった。「明日は南部に着くぞ。今夜は雨が降る。水を心配することはない。おなかかすいてどうしてもがまんできなければ、藁綱をかんでみる」と。十三名の漁夫は

すっかり元気づけられ、よりいっそう念仏に精進した。すると間もなく雨が降ってきた。器にたまった水を飲んで数日の渴をいやし、試みに藁綱をかんでみると、いくら甘味があり、飢えをしのぐことができた。

しらじらと夜が明けはじめると、横雲がたなびき、遠くの山がかすかに見えるようになった。一同は一層元気づけられ、高声念仏にあわせて櫓を漕ぎ続けたため、その日のうちに南部の浜に着くことができた。漁夫一同はありがたい霊告に合掌し、南部に上陸して航海の準備をし、無事に安房国に帰ることができた。

こうした噂はすぐに広まった。世間ではひとえに念仏の功力であり、祐天上人の功德であるといつて、ありがたがった。こんな話を今の若い人々にしたら笑われるかもしれない。そして話の内容を信ずる人はほとんどいないかもしれない。しかし世間には、常識では考えられないことが非常に多い。ことに宗教関係にはそうしたことが多い。

先日雑誌『浄土』に連載された松浦行真先生の「超常物語」を拝読した。先生がガダルカナル島に取材したときの不思議な話が語られていた。ガダルカナル島は第二次大戦のとき日本軍が玉砕した島である。終戦から四十五年もたっているのに、今でもこの島では、深夜、日本の兵隊さんが、ラッパを吹いて通ることがあるという。そしてまた松浦先生は、現地のソロモン大洋漁業の総支配人であった本田寿夫さんの体験談として、次のような興味ある記事を紹介している。

本田さんがこの島に赴任してすぐのこと、真夜中に兵隊さんがでてきて玄関に立ち、水を一杯飲ませてくれという。本田さんは昼の仕事で疲れていたため、水なら冷蔵庫に入っているから、勝手に飲んでくれといった。そうしたら冷蔵庫の扉が開く音がして、ああ旨かった、とか何とか言いながら出て行った。これはすべて夢うつつの中のできごとであった。ところが朝起きてみると、冷蔵庫の水筒の水が半分ほど減っていた。本田さんは、

漁師の救済

大正大学教授 玉山成元

いつも水を一杯に入れて寝る習慣があるので、これはおかしいぞ、とすぐに気づいた。けれども人間だから、忘れることもあるだろうと思つてその場は過したが、しばらくしてまた同じことが起つた。夢うつつの中に出てきたことも同じなら、水筒の水が減っていたことも同じであつたという。本当に不思議なことで、どう考えてみても理解できない。

これは水が減るぐらいだからよいが、現地をおとずれる人々が途中で事故にあつたり、ホテルの寢室で夜中に胸を圧迫されるようなことが起ることもある。そうなると、ただごとではない。

交通事故が、考えられないようなところで起るという。不思議に死者はでないが、そこに行くとき必ず事故が起きるといふ。バスが事故を起こしたアウステン山の下り坂も、首都ホニアラのホテル・メンダナの恐怖の部屋も、すべて激戦地であつたという。表現できない何ものかがあるようだ。

そうしたことから、本田さんは、激戦

地をたずねるとき、必ずお線香を持ってゆき、火をつけて合掌しているという。松浦先生が無事に取材を終えて帰られたのも、カメラマンは、松浦先生の車の運転が上手だったためといつて褒めたが、先生ご自身は、取材をする場合、必ず一巻のお経を読まれて供養を怠らなかつたからであろうと述べられている。

世の中には不思議なことが沢山ある。ロケットに乗って月面を散歩できるような今日でも、ガダルカナル島では不思議なことが起こつている。そんな馬鹿なことをと疑問視する人々が大半であろう。しかし、これは現実である。だから約三百年前に、祐天上人の霊告によつて、十三人の漁夫が助かつた一件も、単なる偶然や作り話ではない。しかもそれは、漁夫らが襟かけ名号を本尊とし、一生懸命に念仏を称えた功德によつてその災難を払うことができたというのである。ガダルカナル島の本田さんはお線香の功德であるうし、松浦先生はお経の功德ということになるう。ここには科学では説明で

きない何物かがある。それを一笑に付してはならない。